

ローマの信徒への手紙13章8～14節

●アドベント(降誕節)に入りました。4週に渡って火を灯すアドベントキャンドルには「希望」、「愛」、「喜び」、「平和」という意味が込められており、暗い世の中であってイエス様がもたらされた尊い恵みに思いをはせる時を過ごします。

●スウェーデンの医師であり公衆衛生学者であったハンス・ロスリングは、多くの人が世の中の貧困の問題は深刻化していると考えているが、実際には極度の貧困率は過去数十年で劇的に減少していることなどを示し、古い情報や、人の関心をそそるメディアの情報によっていかに人間が誤った悲観的な認識を受けつけられているかということを明らかにしています。

●今日のローマの信徒への手紙が書かれた時代はローマ帝国とユダヤ人によるキリスト者たちへの迫害が厳しくなっていた時代でした。その中でパウロは「あなたがたは今がどんな時(時代)であるかを知っています」と記しています。パウロは、今は暗く、絶望的な世の中だと言っているのでしょうか。そうではありません。「夜は更け、日は近づいた」と語っているように、パウロはイエス・キリストの到来によってこの世は夜明けに向かっていくのだと語っているのです。

●その中でパウロは「できれば、せめてあなた方は全ての人と平和に暮らさなさい」と語り、敵を愛し誰に対しても愛と善を持って生きようと勧めます。「互いに愛し合うことの他には、誰に対しても借りがあってはなりません」という言葉について内村鑑三は「神はすでに私たちの罪をキリストのゆえに赦してくださったこの大きな愛に感激して、当然の如く他者を愛することへと押し出されていくのです。これは、すなわち『愛の負債』である。」と述べています。

「夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう」と呼びかけるパウロは、今こそキリスト者は、主の愛が人を変え、人に希望と救いをもたらす事を信じ、証するべきなのだと言っているのです。そして実際にキリストの愛の教えはその後、着実に世に広がっていったのです。

●闇に向かっていくように感じる世の中ですが、2000年前にイエス様がこの世に来られて以来、この社会は変えられてきたのだということを、パウロや多くのキリスト者たちは証してきました。彼らの「日は近づいている」という信仰と地道な愛の働きがそのことを証し続けてきたのです。

キャンドルに一本ずつ火を灯すこのアドベントの時、主の愛は確かに世に満ちていくことを共に信じ、身近な隣人を愛する働きに押し出されていきたい。そう願います。